

■ゾーランは人民議会 (popular assemblies) を創設する必要がある

ガブリエル・ヘットランド/バスカー・サンカラ

ゾーラン・マムダニ氏が真摯に公約を実現しようとするのであれば、政策以上のものがが必要です。働く人々に力を与える制度が求められます。住民集会は、ニューヨーク市に新たなボトムアップ型の政治文化を築く道を開くものです。

ゾーラン・マムダニ氏の選挙勝利は、単なる年外れの番狂わせ以上の意味を持っていました。規律、ビジョン、そして活力をもって推進される民主社会主義政治は、硬直した権力構造と富裕層の静かな拒否権で知られるニューヨークにおいてさえ、広く共感を呼び得ることを証明したのです。選挙戦が成功したのは、ニューヨーカーが突如としてイデオログになったからではありません。ゾーラン氏が信頼でき、誠実で、人々の生活向上に真剣に取り組んでいるという印象を与えたからです。有権者は、住宅費、交通費、育児、食料品といった日々のプレッシャーに根ざした手頃な価格の政策、そして自分たちのために戦ってくれると信頼できる候補者に反応したのです。

しかし、このキャンペーンの根底には、変化へのメッセージがありました。それは政策の変更だけでなく、政治の運営方法、さらには都市における労働者と権力の関係性そのものを変えることでした。この第二の使命は、第一の使命と同じくらい重要です。市民と行政の関係を変えることなく手頃な価格を実現しようとすれば、よくあるパターンを再現してしまう危険があります。すなわち、敵対的なエリート層、手続き上の障害、そして選挙のたびに動員されながらも、統治が始まるとすぐに解体されてしまう社会基盤に囲まれた進歩的行政です。

だからこそ、マムダニ氏は人民集会を統治戦略の主要な柱に据えることを真剣に検討すべきです。被統治者と政府の関係を再構築しなければ、彼の政権は社会主義的な公約のみならず、より広範な進歩主義的公約の実現にも苦戦することになるからです。

●統治手段としての人民集会

ニューヨーク市のすべての社会主義者にとって、手頃な価格は引き続き重要なキーワードであるべきです。生活費への不安こそが、ゾーラン氏の権力獲得につながりました。彼の政権は、その基盤の上で実際に成果を上げられるかどうかによって評価されることになります。しかし社会主義は、たとえそれがいかに不可欠であっても、再分配政策のチェックリストに矮小化されるべきではありません。

民主社会主義の核心は、大衆闘争を通じて労働者階級の力を構築し、即時の改革を勝ち取ると同時に、資本主義を超えた社会の基盤を築くというプロジェクトにあります。再分配や公共サービスを通じて生活水準を向上させるだけでなく、労働者自身が自らの生活を形作る決定を集団的に行う能力を高める

ことも目的としています。この二つの目標は切り離すことができません。物質的な利益は政治参加を可能にし、政治権力はそれらの利益を獲得し、守り、拡大することを可能にします。

人民集会には、これほど理論的ではないものの、同様に説得力のある理由もあります。それは、人民集会がmamuda政権の統治そのものを支えることができるという点です。

ゾーラン・mamuda氏は、制度的・経済的抵抗が網の目のように張り巡らされた状況の中で就任することになります。ニューヨークでは、権力は市庁舎だけに存在しているわけではありません。進歩的な住宅政策を妨害する地主、投資を左右し資本逃避を示唆する企業利益、手続き上の妨害に長けた政治制度、そして市長の権限を制限する国家構造を通じて、権力は行使されています。

こうした予測可能な障害を突破するためには、mamuda氏は選挙サイクルを超えて圧力をかけ、エリート層の拒否権に挑み、具体的な政策闘争をめぐる勢力バランスを変えることができる、組織化された支持基盤を必要とします。住民集会は、象徴的な行為ではなく、統治の優先事項を都市における集団行動と結びつける制度として、その能力形成を支援する有効な手段となります。

▼mamuda氏には、選挙サイクルを超えて圧力をかけ、エリート層の拒否権に異議を唱え、具体的な政策闘争をめぐる勢力バランスを変化させることができる、組織化された支持基盤が必要になります。

実際には、これは一般の人々が地域社会や日常生活に影響を与える決定に参加できる、定期的かつ制度化された空間を創出することを意味します。うまく機能すれば、集会は結社活動を強化し、持続的な参加ネットワークを構築し、一時的な選挙動員を持続的な政治力へと転換する助けとなります。集会と、それに連なる大衆統治プロジェクトとしての改革は、労働者階級のコミュニティに具体的な物質的利益をもたらすことができます。ラテンアメリカの都市における参加型制度の研究は、こうした制度が人々の生活に実質的な改善をもたらす水準にまで、大衆の参加を引きつけ得ることを示しています。

労働者や貧困層に、自らの生活に影響を与える決定について議論し、有意義な意見を述べる機会を与えることで、大衆集会は労働者階級の政治的エンパワメントを促進します。これは、あらゆる民主社会主義的ビジョンにとって不可欠な要素です。

また、集会は進歩的な政策に対する同意形成にも寄与します。研究は一貫して、人々が意思決定を公正で包括的、かつ意味のあるものだと思える場合、たとえ結果に賛同できなくとも、それを受け入れる可能性が高まることを示しています。参加は結果だけでなく、正当性の確保にとっても重要です。

ゾーラン市長が映像博物館で12時間にわたり一般のニューヨーカーと対話した最近のイベント「市長は耳を傾けている」は、その好例でした。このイベントは、ゾーラン市長が市民に内緒で統治するのではなく、市民と対話しながら統治する姿勢を示すために企画され、大きな注目を集めました。ただし、この試みには限界もありました。市長は話を聞いたものの、それ以上の具体的な約束はしなかったのです。住民集会は、このイベントが生み出したエネルギーを、より広範な大衆統治のプロセスへと結びつけることができます。

適切に設計された参加型制度は、気候変動のような政治的に敏感で対立の激しい問題においても、分極化を緩和し、社会的な結束を促進できることが示されています。議論を共有する経験は、イデオロギーや社会的分断を越え、国家機関と市民社会の双方に広がる停滞状況への対抗力となります。また、人々は政治家よりも身近な仲間からの情報を信頼する傾向があるため、集会は意思決定の場であると同時に、信頼できる情報伝達のチャンネルとしても機能します。

要するに、民衆集会は統治の妨げとなるものではなく、行政の力を弱めるところか、むしろそれを強化する統治手法なのです。

●アセンブリの仕組み

住民集会には単一のモデルはありません。さまざまな文脈において、多様な形態が採用されてきました。ラテンアメリカでは参加型予算編成、保健評議会、水道局があり、ヨーロッパや北米では近隣評議会や市民パネル、フランスをはじめとする地域では気候変動に関する集会などがその例です。その成果は実に多様です。

参加型予算編成は、しばしば成功例として挙げられます。とりわけブラジルのポルトアレグレでは、参加型予算編成によって支出の優先順位が見直され、公共サービスへのアクセスが拡大し、参加と説明責任の文化が育まれました。また、労働者階級のコミュニティに対し、舗装、街灯、バス路線といった有益な物的資源を効果的に確保する手段が提供されました。一方で、アメリカ合衆国では、参加型予算編成は一般により小規模で実施されており、自治体予算のごく一部しか対象とならず、成果も限定的なものにとどまっています。

ここから得られる教訓は、集会そのものが機能しないということではなく、その設計が決定的に重要であるという点です。制度は人々に力を与えることもあれば、逆に挫折感を与えることもあります。単一の形式に固執するよりも、民衆集会が労働者階級の政治的主体性を高め、組織力と動員力を構築するために必要な一連の原則を明確にする方が合理的です。

第一に、集会は一般市民に対し、自らの生活を形作る決定に影響を与える、真に意義深い機会を提供しなければなりません。影響力を伴わない参加は、冷笑的な反応を生むだけです。集会が単なる象徴的な議論の場、すなわち政策や戦略に具体的な影響を与えない場だと認識されれば、信頼は急速に失われてしまいます。

第二に、集会は有意義な審議を促進するように設計されなければなりません。これは、単に不満を表明したり、好みを集計したりすること以上を意味します。参加者がトレードオフを比較検討し、対立する議論に耳を傾け、ある行動方針を別の方針より選ぶ理由を提示できる、構造化された空間を生み出す必要があります。

審議の場を設けることは、単なる手段的な理由からだけでなく、非エリート層が「自らを統治することを学ぶ」プロセスであるという点において極めて重要です。議論と審議は、労働者階級のコミュニティが、

人種、性別、言語、国籍、能力など、人々を分断してきた多くの境界を越えて連帯を築くための重要な手段でもあります。

▼集会は、一般の人々に対して、自分たちの人生を形作る決定に影響を与える、真に意義深い機会を提供しなければなりません。影響力を伴わない参加は、冷笑主義を生み出すだけです。

しかし、意図的な設計がなされなければ、参加型制度は、時間、自信、政治経験といった点における既存の格差や不平等を再生産してしまう傾向があります。言い換えれば、既存の活動家だけのための「話し合いの場」へと変質してしまう危険があるのです。このリスクは、集会そのものに反対する理由ではなく、むしろ慎重な制度設計の必要性を示しています。

そのため、審議には適切なファシリテーション、明確な議題設定、そして明確な意思決定のプロセスが不可欠です。また、参加のしやすさにも十分な配慮が求められます。具体的には、勤務時間や育児を考慮した開催時間と場所の設定、正式な政治の場に不慣れな人々も安心して参加できる形式が必要です。

ここで決定的な役割を果たすのが政治的リーダーシップです。民衆集会が、すでに政治化された一部の層を超えて、より広範な労働者階級の参加を促すためには、ゾーラン氏とその政権がこのプロセスを積極的に開始し、主導する必要があります。具体的には、明確な優先事項を設定し、参加が実際に意思決定を形作ることを示し、集会からのフィードバックを政権の政策課題に明確に反映させなければなりません。このようなリーダーシップがなければ、参加型の場は、すでに政治に慣れた人々だけが利用する空間になりがちです。

ニューヨークにおいては、集会は主に二つの規模で開催されるべきです。近隣住民集会は、学校、図書館、あるいはニューヨーク市住宅局のコミュニティセンターなどで、月に一度開催することが考えられます。これらの集会では、住宅、交通、地域の安全といった、地域に密着した具体的な課題が扱われ、市の職員も参加します。

区レベルの集会は、四半期ごとに開催し、特に予算や主要プロジェクトを中心とする、より広範な優先事項について議論と優先順位付けを行います。年間の集会サイクルの最終段階では、明確な決定事項（たとえば優先政策）が示され、それが公開されたタイムラインや予算案に反映されることになります。

集会が機能するためには、通訳、保育、ファシリテーターへの手当、そして常勤職員の確保が不可欠です。集会の日程は、州や市の予算編成など、既存の意思決定サイクルと連動させるべきです。そうすることで、集会は真の制度的権力への入り口として機能し、都市における参加型構造が、ここで概説したより広範な提案と整合するようになります。

また、集会は、市役所発のプロジェクト、予算・データに基づくキャンペーン、大衆的なボランティア活動への支援（市が支援するボランティア団体など）、そして一貫性と権限を付与された枠組みのもとでの既存の州制度・行政プロセスの再構築と連携させるべきです。

必然的に、地域ベースの集会と課題ベースの集会、助言的な集会と拘束力を持つ集会、対面形式とハイブリッド形式など、さまざまな選択肢が存在します。こうした選択は、労働者階級の主体性を高め、改革を持続させる社会的基盤を構築するという、より大きな目標に基づいて行われるべきです。

●国家内外の民主主義

これらの問題提起は決して新しいものではありません。1970年代、マルクス主義理論家ニコス・プーランツァスは、社会民主主義とソ連型国家社会主義の双方が、大衆の主体性に対して不信感を抱いていると警告しました。一方は労働者の利益のために資本主義を上から管理しようとし、他方は民意の名の下に多元主義を抑圧しようとしていました。

これに対して彼が提示した代替案が、「二重民主化戦略」です。すなわち、代表制民主主義を変革すると同時に、国家の外部において直接民主主義の形態を拡大していくという戦略でした。

▼マムダニ氏は、民衆の熱意を一時的な資源として消費することもできますし、新たな政治の基盤としてそこに投資することもできます。

この構想は、選挙や代議制政治を否定するものではありません。むしろ、それらを深化させるための手段です。この見方によれば、代議制民主主義は、圧力をかけ、アイデアを生み出し、指導者に責任を負わせることのできる、組織化された市民によって、弱体化するどころか強化されます。このような運動は、テクノクラートによる停滞と権威主義的な反動の双方に対する防壁となります。

このビジョンは、今日においてもなお強い説得力を持っています。権限を与えられた運動を欠いたまま市役所から統治を行えば、根底にある権力関係に手を付けないまま、限定的な改善にとどまるテクノクラートの社会民主主義に陥る危険があります。

私たちは、ビル・デブラシオの再来ではなく、すでに急進的民主主義の理念に精通した社会主義者でありながら、これまでに解き放たれてきた政治化の限界と、そのエネルギーを恒久的な制度的変化へと転換する必要性を深く理解している人物を選出できたという点で、幸運であったと言えるでしょう。

●今いる場所から始める

ゾーラン・マムダニ氏が選挙で得た支持は、都市部の労働者階級が組織的に持っている力をはるかに上回るものでした。多くの人々は日々の生活に追われ、政治に対して懐疑的であり、継続的な参加には慣れていません。

だからこそ、住民集会が重要なのです。住民集会は、選挙における支持と、永続的な組織化とを結びつける橋渡しの役割を果たします。住宅価格の高騰といった具体的な問題に結びついた地域集会や区集会は、人々をゾーラン氏を当選へと導いた政策課題につなぎ、その形成過程に参加させ、有権者としてではなく、政治的アクターとして自らを認識する機会を提供します。

その意味で、集会は既存の運動を「活用する」ための単なる手段ではありません。むしろ、運動そのものを構築するための手段です。選挙時の熱意を、持続的な民主主義の力へと転換し、まだ十分には存在していないボトムアップ型参加の条件を、上から整えるための手段なのです。

ゾーラン・マムダニ氏には、きわめて稀有な機会が与えられています。民衆の熱意を一過性の資源として消費するのか、それとも新たな政治基盤として投資するのかは、彼自身の選択にかかっています。集会は万能薬ではありません。しかし、物質的改革と並行して政治的主体性を拡大する制度が存在しなければ、この瞬間が持つ約束は果たされにくくなり、容易に反故にされてしまうでしょう。

民主社会主義が、単なる進歩的行政以上の意味を持つためには、制度的な表現が不可欠です。ニューヨークにおいては、まず一般市民に真の議論の場を提供し、未来を形作る力を与えることから始めるべきです。

本記事に対して有益なフィードバックと協力を寄せてくれた Gianpaolo Baiocchi 氏に感謝します。